あおぞら

Vol. 87
2023.7月号
Denenchofu Chuo Hospital
田園調布中央病院広報誌

TOPICS:肺がんについて・検診のご案内

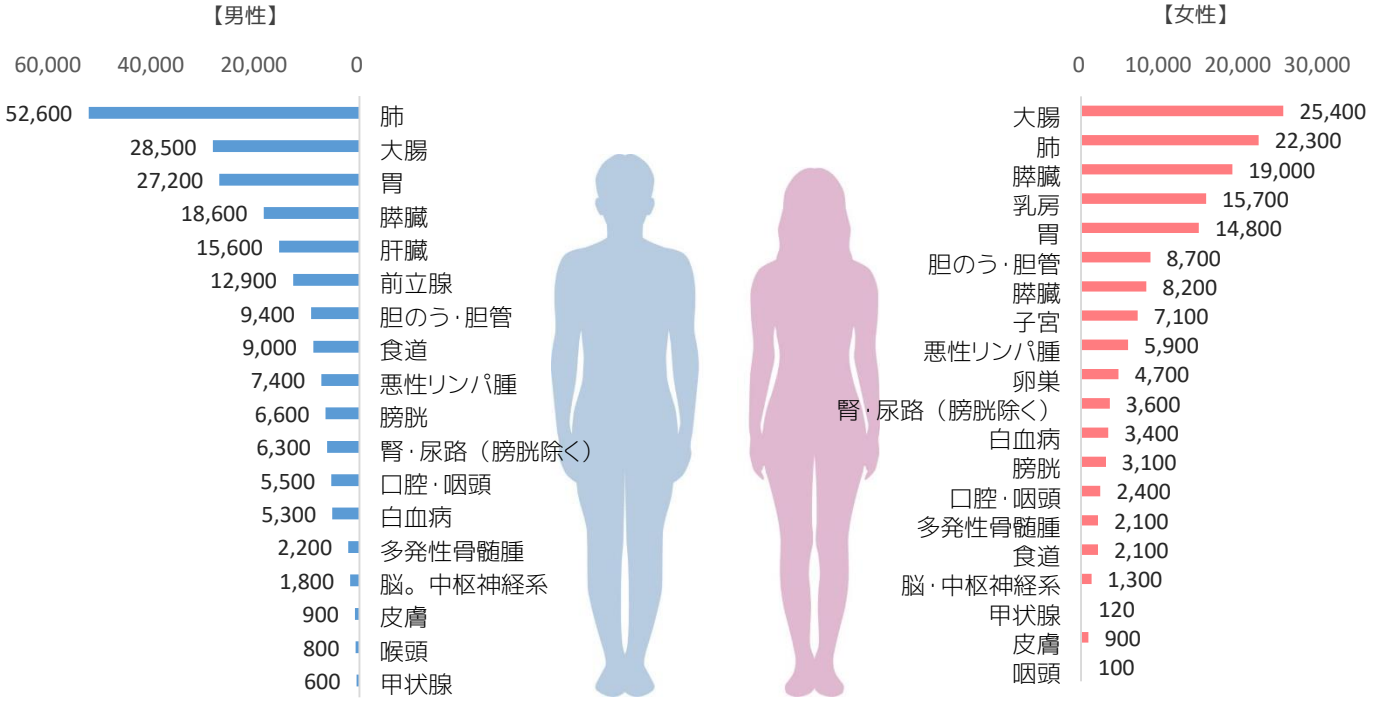
今年度も当院では大田区がん検診を実施いたします。対象年齢の方はどなたでも受診いただけます。ご自身の健康状態を把握するうえでお役立ていただけると幸いです。肺がんは、現在男性で10人に1人、女性で20人に1人が生涯のうちに診断され、最も死亡率の高いがんとなっています。今回は肺がんについて取り上げます。

肺がんについて

肺がんは、気管支や肺胞の細胞が何等かの原因で癌化したものです。進行すると癌細胞は周りの組織を壊しながら増殖し血液やリンパ液の流れに乗って転移します。転移しやすい場所は、リンパ節や肺の中の他の部位、骨、脳、肝臓、副腎です。肺がんにもいくつかの種類があります。主に腺がん、扁平上皮がん、大細胞がん、小細胞がんの4つです。また、この中で腺がんは最も多く、肺がん全体の半数を占め、その次に扁平上皮がん、小細胞がん、大細胞がんの順に続きます。がんの症状は、早期には見られないことが多く、進行してから初めて出てくることがあります。主な症状は、咳や痰または血痰、胸の痛み、動いた時の息苦しさ、動悸、発熱などが挙げられます。特に、咳や痰は最も多い症状で、原因がわからない咳や痰が2週間以上続く場合や、血痰が出る、発熱が5日以上続くときには早めに医療機関を受診しましょう。

部位別予測がん死亡数（2021年）

出典：公益財団法人 がん研究振興財団「部位別予測がん死亡数（2021年」を基に作成



出典：がん情報サービス「がんの発生要因」https://ganjoho.jp/public/pre_scr/cause_prevention/factor.html

肺がんのリスク因子について

肺がんのリスク因子としては、喫煙が挙げられます。喫煙者は非喫煙者に比べて男性で4.4倍、女性で2.8倍、肺がんになりやすく、さらに喫煙者の中で日常的に飲酒量が多いと、より確率が高くなります。また、肺がんの中で扁平上肢がんと小細胞がんは喫煙との関連が大きいとされています。そのほかのリスク因子としては、受動喫煙、肺結核、慢性閉塞性肺疾患、間質性肺炎、アスベストなどの有害物質への曝露等があります。これらに該当する項目の多い人は、肺がんにかかる確率が高くなります。

肺がんにならないための予防と早期発見・早期治療の重要性について

肺がんの予防には、禁煙はもちろん節度ある飲酒、バランスの良い食事、適度な運動、適正な体型の維持、感染予防が有効であることが分かっています。喫煙者が禁煙を始めて１０年くらい経つと喫煙していた時と比べて、がんのリスクが半分ほどになります。ただ、どれだけ徹底した予防をしたとしても、がんになることはあります。一方で、早期発見・早期治療により治る可能性を高めることができます。肺がんではステージ１の段階で見つけ治療を始めると、５年生存率が７５％以上です。日頃から予防と合わせて適切な検査を受けることが重要です。

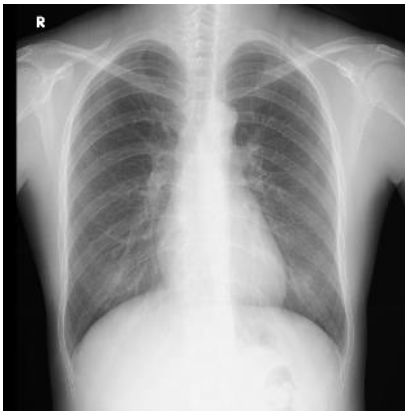
検診で受ける検査について

肺がん検診では、問診・胸部レントゲン検査・喀痰細胞診を行い、異常が見つかれば精密検査（CT検査・気管支鏡検査）を行います。レントゲン検査とCT検査についてご紹介します。

〈胸部レントゲン検査〉

胸部レントゲン撮影において、より正確な画像を撮影するには、患者さまのご協力が必要です。撮影時に十分に息が吸えていないと、肺の膨らみが足りず、見やすい画像になりません。診断の精度にも影響することがあります。

【息をあまり吸わなかった時の画像】



【息を大きく吸った時の画像】

２つの画像を比べると、右の画像のほうは肺が膨らんでより広く写っていることがわかります。

気管支や血管と重なっているところに病変があった場合は、息を大きく吸ったときのほうが分離して描出されやすくなります。ただし、心臓や気管支付近にできた中心型の肺がん、または小さな肺がんの場合は、胸部レントゲン検査だけで見つけることは難しくなります。精度の高いCT検査を合わせて行うことで、レントゲンだけでは見つけることが難しい病変も見つけられるようになります。

〈CT検査〉

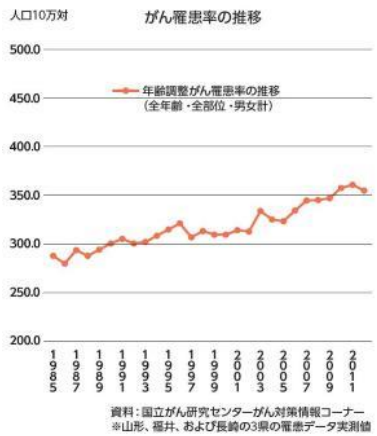
CT検査では、体を輪切りにした断面を色々な位置や角度から見ることができます。CT検査においても、レントゲン撮影と同様に大きく息を吸って撮影をすることがたいへん重要です。大きく息を吸って撮影したほうが、血管や、臓器が分離して描出されやすくなり、病変を見つけやすくなります。CT検査の方が、レントゲン撮影よりも息を止めている時間が長くなります。また、撮影中は体を動かさないようにご注意ください。撮影中に体が動いてしまうと、画像がぶれてしまい病変があっても画像に写りません。レントゲン撮影では見つけることが困難な小さな病変も、CT撮影は描出することに長けています。近年がんは治る病気になってきました。毎年検診を受けることをおすすめいたします。

がん検診の必要性

国民の２人に１人が何らかのがんになると言われています。

日本全国で２０１６年に新たにがんと診断された症例は、９９万例を超えています。がんの罹患率年次別推移の資料（右図）を見ても増加していることがわかります。また、生涯でがんにより死亡する確率（生涯累積死亡リスク）は男性２４％（４人に１人）、女性１５％（７人に１人）で、今や日本人の死亡原因の第１位となっています。このような誰しもかかる可能性があるがんですが、診断と治療の進歩により、一部のがんでは早期発見、早期治療が可能となりつつあります。がんによる死亡を少しでも減少させるため、検診を正しく受診しましょう。

引用：大田区「がん検診のススメ～がん検診の正しい知識～」
https://www.city.ota.tokyo.jp/seikatsu/hoken/otona/kenshinnosusume.html



当院では下記のとおり各種検診を行っております。対象年齢の方はどなたでも受診可能です。詳しくは当院健診係へお問合せください。電話：０３-３７２１-７１２１（代）

令和5年度（2023年6月1日～2024年3月31日）

がん検診等のご案内

検診の種類	対象年齢	実施期間
〈要予約〉胃がん検診 （エックス線検査）	40～49歳 （昭和49年4月1日～昭和59年3月31日に生まれた方）	7月1日～2月中旬
〈要予約〉胃がん検診 （内視鏡検査）	50歳以上 （昭和49年3月31日以前に生まれた方） ※エックス線検査・内視鏡検査のいずれも受診可能です	7月1日～2月中旬
〈要予約〉肺がん検診	40歳以上 （昭和59年3月31日以前に生まれた方）	7月1日～2月中旬
大腸がん検診	40歳以上 （昭和59年3月31日以前に生まれた方）	7月1日～2月中旬
〈要予約〉乳がん検診	40歳以上の女性 （昭和59年3月31日以前に生まれた方）	7月1日～2月中旬
39歳以下基本健康診査	18～39歳 （昭和59年4月1日～平成18年3月31日に生まれた方）	７月1日～12月末
特定健康診査	40歳以上 （昭和59年3月31日以前に生まれた方）	6月1日～3月末
前立腺がん検診	60歳・65歳・70歳の男性	6月1日～3月末
B型・C型肝炎ウィルス検診	40歳以上（昭和59年3月31日以前に生まれた方）で 令和4年度まで肝炎ウィルス検診を受けていない方	6月1日～3月末
〈要予約〉認知症検診	70歳・75歳	7月1日～2月中旬
〈要予約〉眼科（緑内障等）検診	40歳・45歳・50歳・55歳・60歳・65歳・70歳	７月1日～12月

院内は引き続き
マスクの着用をお願いいたします。

厚生労働省より2023年3月13日以降のマスク着用の考え方について指針が発表されました。
「令和5年3月13日以降、個人の主体的な選択を尊重し着用は個人の判断に委ねることになります。本人の意思に反してマスクの着脱を強いることがないよう、個人の主体的な判断が尊重されるよう、ご配慮をお願いいたします。」とあります。

ただし、「医療機関を受診するとき」「高齢者など重症化リスクの高い方が多く入院・生活する医療機関や高齢者施設などへ訪問するとき」はマスク着用が効果的であるとして、マスク着用を推奨しております。当院では、患者さまの安全と健康を守るため、受診される方、入院される方、付き添いの方へ引き続きマスク着用をお願いさせていただきます。

当院のスタッフもマスクの着用を徹底しております。恐れ入りますが、マスクをお持ちでない方は、マスクをご購入いただき、マスクを着用のうえご入館ください。皆さまのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

田園調布中央病院 病院長

「マスク着用について」厚生労働省リンク先：
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kansentaisaku_00001.html

出典：首相官邸ホームページ「新型コロナウイルスへの備え ■手洗い」https://www.kantei.go.jp/jp/headline/kansensho/coronavirus.html

あおぞら
田園調布中央病院 広報誌
あおぞら〈2023年7月号〉
発行
Toda Medicalcare Group 戸田中央メディカルケアグループ
医療法人社団七仁会
田園調布中央病院広報委員会
〒145-0071 東京都大田区田園調布2-43-1
http://denenchofu-hp.jp/ TEL.03-3721-7121（代表）